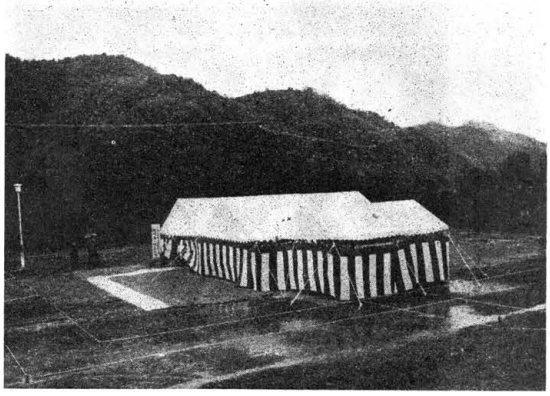
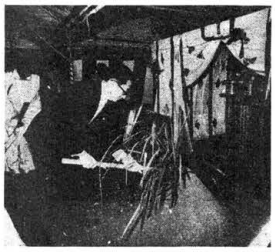
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
定価 一年送料共 1000円

宗像大社神宝館建設地鎮祭並起工式斎行





当大社神宝館建設地鎮祭並起工式は十月二十七日午前十一時、現在の宝物館前庭の広場に特設斎場を設け、神社関係者約五十名参列の下厳かに斎行された。

当日は、早朝より強い風雨に見舞われ、祭典の執行もあやぶまれるような状態であったが、工事関係者の懸命の努力によって雨除けの大幕が張られ、立派な斎場が舗設された。

定刻、荘重な雅楽の響きの中、宇都宮祢宜以下祭員参進、修祓、献饌に次き、神宝館建設工事の安全と完成を祈念する祝詞が奏上され、更に四方祓の儀が行われた。

続いて起工の儀が行われ、先ず当大社葦津宮司の手により忌鍬に刈初の儀があり、次に、宗像大社復興期成会々長出光佐三氏の代理として出光興産株式会社副社長出光昭介氏の鍬入の儀があり、最後にこの大工事を請負う事となった清水建設株式会社の代表として副社長坂野常隆氏の手により杭打ちの儀が行われた。

直会の儀は会場を勅使館に移して執行され、先ず出光興産株式会社副社長出光昭介氏の挨拶があり「昭和十七年宗像大社復興期成会が結成されて以来、三十数年の長年月の間、昭和四十六年の昭和の大遷宮、五十年の第二宮、第三宮の御遷宮を完成すると共に、神社史の編纂、更に昭和二十九年より四十六年までの三次にわたって行われた「沖津宮祭祀遺跡」の学術調査に伴う約二万点の出土品、又、一万点論、日本の国家的役目で神宝館建設は誠に有意義な事であり、一日も早く完成が待たれる」旨を述べられた。続いて当大社葦津宮司の挨拶があり、更に、来賓として福岡県神社庁長浄見晴夫氏、衆議院議員山崎拓氏、清水建設株式会社副社長坂野常隆氏の祝辞があり、県議会議員伊豆善也氏の音頭によって乾盃が行われた。

斯くして十一月には愈々工事が開始され、来春三月コンクリート躯体工事完了、来年十月には、三階建高床式、延面積約七百坪の威容を誇る神宝館が完成する予定である。

写真（上）神宝館建設地に設けられた祭場
（中）鍬入の儀を行う出光昭介副社長
（下）基礎ボーリング工事進行中

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園一丁三一（〒八一三）
電話福岡（〇九二）六五一一九四五六番
本社 京都市中京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三五一一三四二（代）～四番
京都市中京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三五一一三四・六〇六番

論説 自己啓蒙の活路追究 ―心の開発―

一般に神仏に対する祈願は、日常平易に慣習的に行われているが、その祈願は他の救済の場合、自己の福祉増進の場合、みな同一であるかのように思惟されるけれどもそこに根本的の錯誤がある。他人の商売繁昌や病気平癒の祈願では、祈りを捧げる者が行事の僧侶神職とすれば慈悲心が湧く、その慈悲心が救済と思惟される。

自己の福祉祈願であれば、職業的に祈願する宗教家たると否との別なく慈悲心発起させるのではない。従って自己の場合には慈悲心の発起はなく、自己の救済はあり得ないものとなるのである。

ここに心の開発が、菩法に託せられ、同時に一期一会の解決以外にないセルフの禅道がある。「心の開発」と言っても、容易ならぬ大変な難問を包含する感がある。

その難問を解決するものが、間（ケイタ、マ）の廻り合いである。語句に捉われるのではないが、合いは愛であると教えられても、この辺で心の開発と一口に言っても容易でないことを感ずる。

「人は考える葦である」というパスカルの有名な言葉を、今日種々のスポーツに熱中する青少年達の場合に当ててみたい。

彼等はグループの強い刺戟をうけて、限度を越えて熱中するため障碍も多い。特に彼等が苦痛とするのが身体の故障である。彼等の強い意欲はそれを克服する。つまり逆境を背負って生きる。

逆境を背負うと書くと、想起される人があるが、ある事情から本人も驚く程の左遷的転勤となった。失脚まではゆかぬが、大変な逆境を背負ったのである。

島外は無念の中に遂に活路探究に成功した。文筆はよく彼の逆境を背負って生きたのである。この頃観光ブームの波に乗って宣伝される石州津和野を訪った時、資料館に列べられた遺品を見て、逆境を背負って起ち、そして育くみ抜いた人生行路を知らされた。

青少年達のスポーツ障碍もまた、禅道の間（マ）の廻り合い即ち愛の生き方を見出して欲しいのである。それが心の開発に通じる。障碍克服のために発動する他の人による祈願、そこに慈悲心が生れ、それが一般に言う愛である。一途にそれが望まれる処、間（マ）の廻り合いに不正も打算も介入の余地はない。

精神面の強調に対して、対象的に付加するのではないが、ノーベル賞の湯川博士は先程「敗戦後の日本は科学文明を高めることが肝要だ」と提言している。科学文明の昂揚というも、人間自身の探究がその基底にあらねばならぬとする。何故に、如何にして、理由と方法の疑問の終極を考える時、己の存在こそは疑えない極限に到達する主張がある。

精神面の開拓、その流れに乗ってか、昨今は禅ブームと称される程、学生間にも坐禅熱が盛んになっている。欧米の青年学徒の禅研究は見逃せないよい傾向である。

郭末若は「神とは常識にして事実である」と述べ、中峰は「神とは心の名である」と説いているが、前述の如く禅を学ぶことは心を学ぶことであり、延ては自己を学ぶとも解せられる。青年学徒の指針には、なお難し過ぎるかも知れない。要はどこまでも合理的実証的でなければならぬとする。

信長の激怒により焼き殺された江州恵林寺の快川和尚の火中の大悟「心頭滅却すれば火も自ら涼し」をテーマにして、火も亦涼しい自己啓蒙を主張したいのである。

◇十一・十二月祭典・行事案内◇

※辺津宮

十一月二十三日 新嘗祭 午前十時

この祭典は、秋の五穀豊穣収穫の神護を感謝し、神慮を慰め奉る祭です。この日を勤労感謝の日として祝うのはこの精神に基づくものであります。

十二月一日 月次祭 午前十一時

十二月十五日 古式祭（お座） 午前六時半

その年の新穀で作られた御飯、酒をはじめ古式に則り九年（くねんぼ・ミカンの一種）、菱餅のお菓子、江口の浜から献げられる「ゲバサモ」（海藻）等の特殊な神饌を供え、五穀豊穣を感謝する祭であります

祭典終了後の直会を「お座」と言う。「お座」には新酒（いむしろ）が敷かれ、忌穢（いみほ）の剰し立てられた御飯を栗の木箸で食し、無病息災を神恩に謝すと共に、翌年の五穀豊穣を祈念する神事であります。

この「お座」は一番座〜六番座位まで行なわれます。

古式祭神事は、郡民の厚い信仰に支えられて約八百年も続いている民間伝承の、当大社唯一の祭りであります。郡内外より例年多数の参列があり盛大に行われます。

本年も各位御参列下さいますよう案内申し上げます。

「お座」料は米一升と定められております（お金でもよい）

十二月十五日 鎮火祭 午前九時

この祭典は郡内氏子中の各家々を火災より守るための祭典で郡内五ケ町村の町村長、消防団関係、郡消防本部、宗像警察署等の関係者多数参列のもと、拝殿において鎮火の神事を古式厳しく行なっています。

※中津宮

十一月二十一日 宮崎厳島神社祭 午前十一時

筑前大島村宮崎に鎮座する厳島神社の祭典で、大漁満足、海上安全を感謝する祭であります

祭典には宮崎地区全員参列、この日は漁止となります。

十二月一日・十五日 月次祭 午前十一時

十二月三日 恵比須祭 午前十一時

この祭典は大島村全漁民挙げての祭典で、大漁満足、海上安全の祈願を中津宮本殿、並に末社恵比須神社に於て斎行致します。

この日は全村漁止となります

※沖津宮

十二月一・十五日月次祭午前十時

阿蒙少言

現代世相は、平和友好の旗をかざしながら、その旗を揺る風は厳しい。内外の情勢は平和の旗を看板にし、よく自につく人生勝負を表に見せぬだけである。老生求められて「平凡則無事」を雅毫紙や色紙に何枚か書いたが、その平凡なかなか難しい●人名によく凡夫（ツネオ）を見かける。愛児の無難な成長を祈る親心がこの文字を選ばせたのであろう。俊秀逸材そしてその資質が群を抜いての出世の栄光をもたらすこと、誰しも望むところだが、厳しい勝負の関門通過は容易でない●非凡の人材の人生航路を語りたいが、現代の政財界人に焦点を合わせると、種々の批判の筆勢に当り障りがあっても面倒だから、少々古いが太閤さん等元亀天正組を登場させる●茶目利休は門地権勢のない身で、秀吉の威武に屈せず意気地を貫いた快男児。当世の茶道が、無刀の名剣に光を感あるは、それだ●利休の群世の喝を、茶聖の師匠が、御神興を拝せんと集ひし人車神輿を押し尽せり

宮田 片山 一

眼の前に二人の老婆徐をゆく暫く歩みて襖伸ばしをり

戸畑 田中ハツセ

表情をあらはに見せぬ新妻の喜びしかと疑ひて見る

東郷 藤崎 辰子

浜のバス待つしばらくを見つつをり漁師は漁網に洗を焚き込む

東郷 田中 春子

下駄の音鳴らして来れば猫の眼の疑視に会へり土塀の陰に

田久 立花 勇雄

雪雨に山なみゆけば阿蘇の里雲海たなびき墨絵のごとし

武丸 原田 リノ

非常ベルの鳴りしも知らず霧島の宿に目覚めて笑はれてをり

吉留 高山 信子

六十路すぎなおわが内に感動の魂（たま）ゆする思いあれば生きゆく

箱崎 吉村 三郎

神苑の桜根に濡れ立つ二羽の鳩胸膨らませ首を振りいる

古賀 吉武 邦夫

いとけなき我が孫二人息巻きて作りて見るその力ぶ

福岡 林 まつえ

久々に帰り来たりしひい孫がおけさ踊れば満場拍手

田久 橋本 良輔

サルビヤの朱は日ましに際立ちて秋竹にけり衣更へせむ

第一〇六回 宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切 詠草到着順

菩提に芙蓉ピンクの優美なる花咲きつゞで眺めあかなく

武丸 原田まつ代

福間 木梨よしの

見終りて思わず祈るこの平和ホロコーストに月も凍りぬ

原町 八波 五月

ガ島より生きて還りし弟が戦後八年目病みて死にたり

名古屋 野崎 傅三

明日のほる御嶽の峰を仰ぎつゝ木曽の情に落涙を焼く

須恵 早川 フサ

憎しみを持て余したる日も過ぎ行きてすき透りし心にて春華焚きつゝ

宮田 片山 一

溜池の水も尽きたり力なく稲の立穂の陽にそよぎいる

徳重 石松や寿子

逗子よりの便はたえぬ隣室の友も滋賀県へ帰り給ひて

田熊 鷲津かつ代

庭先まで植えし茶の木に花みちて幾河の農家人かげもなし

福岡 吉田 信夫

歌ドラムはげしくひびき若人の街のまつりよ秋晴れの午後

深田 中野 節子

落柿の崩れて匂ふ掃き寄せ ほしいまま なる蜜蜂の唸り

赤間 白木うめの

遠ク来て火山の灰に毎日を ゆまはされると云ふを聞きたり

香椎 桜井 ツ子

台風に吹き倒されしポプラの根方にくれなゐの新芽萌えをり

原町 中村 幸

わが家に入りたりなる尚家の猫がこの朝背輪してゐる

福間 広渡一寿軒

長命の父母の如くに生くらんと吾をはげます言葉がしき

大井 吉田ますみ

群を離れ住みつきしなら鳩一羽今朝も啼き居り我が裏の山

田島 吉武 武雄

降り注ぐやだまの中に散華せ明日は友の忌彼岸花咲く

津屋崎 永島 昭子

かって吾がレコード持ち投ぐを観戦しつゝ想いはつきぬ

田熊 今村 重刀

鉢の菊蕾の色も見えそめて最後の手入に輪台をつく

鐘崎 村田 四郎

荷揚場に水揚されし魚は跳ね母子のゴム衣は鱗に光る

津丸 藤田 肇

明朝を待かしたる八幡船その末裔（すえ）すえなるで御阿礼の供は

津丸 松尾 豊

久方に雨降り出せば傘さして濡れいる菜畑を見にぞ行きたり

田熊 力丸 一郎

今に見る維新の志士のゆめの跡萩の城下の古きおもかげ

池田 永富 臻

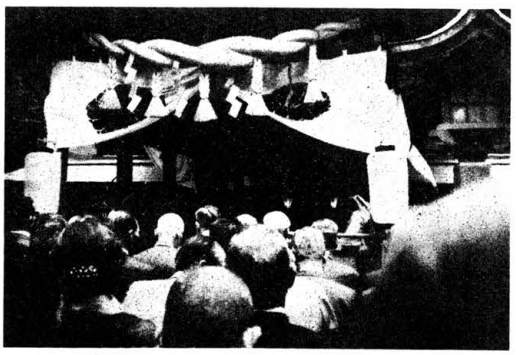
おだやかに日は照りゐたり沖をゆく漁船の一つ島かげに消ゆ

田久 小方 実

宗像大社
沖津宮・中津宮秋の大祭
―大島村民総出で錦秋の一日を楽しむ―

宗像大社沖津宮・中津宮秋の大祭は、旧暦の九月十五日に行われるため、毎年月日が異っくる。今年は十月十六日であった。

これより先、十月八日、境内整備と〆縄作りのため、大島村青年団、同漁協青壮年部、奉賛会役員等六十数名が早朝より境内に参集



二手に分れ、一組は二キロ離れた岩瀬海岸に出向き小石を採取、トラックで中津宮に十数回搬入、敷詰め作業を奉仕した。玄海の荒浪に洗われた小石は青々としており、境内に敷詰められると今までにない清新壮厳な神気が漲った。

一方、境内の参籠殿では〆縄作りが行われた。今年の新藁を選りすぐり一本一本寧に編み上げる特に中津宮拝殿前のそれは、直径二十センチもあるため、二十人余りがかかり、御一終った後再にナイロンチグスで周囲を締上げる。このためか、他の〆縄に較べ一段と引締ったものとなった。

十月十五日、境内の〆縄が一斉に張り替えられ、午後三時から境内を守り給う地主神を祭る地主祭、同五時からは沖津宮遥拝所と中津宮に於て宵宮祭が執り行われた。

沖津宮遥拝所の宵宮祭は感動的である。太陽が西の水平線上にかかり洋上の波はキラキラと輝く。遥拝所一帯に暮色が漂い、洋上かすかに点の如く見えかくれする沖ノ島に向って一同只管祈りを捧げる。見えるものは茜色の空と霊ノ浪のうねりだけである。

翌十六日、午前九時より島の東宮崎部落の厳島神社と海抜二七一米の御獄山上の御獄宮の祭りがそれぞれ斎行された。同十一時に中津宮本殿で大祭が執り行われた。

葦津宮司の祝詞に続き、漁協組合長遠藤香加氏氏が白い装束姿も凛々しく氏子奉幣使となって奉幣の祝詞を奏上した。浦安舞の後、参列者は玉串を奉奠、深い祈りを捧げた。引続いて表彰式があり、社務所に冷房機を奉納した日立家電九州営業所、扁額を奉納した神湊の河野氏にそれぞれ感謝状と記念品が贈呈された。直会は海辺の照海殿で盛大に催され、午後からは境内で小中学生の相撲、仮設舞台で歌や踊り十五番が奉納された。快晴に恵まれて参拝者も多く、筑前大島は終日秋祭りの内に暮れたのである。

「神郡宗像の秋祭り」(2)
―各所で氏神祭盛大に斎行―

織幡神社
―玄海町鐘崎―

九月三十日織幡神社秋祭りが厳粛に斎行された。

鐘崎の岬の突端の佐屋形山に鎮座する織幡神社は、古く延喜式名神大社に列せられ、当社の境外摂社の由緒をもつ旧県社である。例祭には、当社より献幣使が参向し祭典が執り行なわれる。

当日夕刻本殿より御神輿が神輿に遷され、境内下広場の御旅所に奉安されて、午后七時より祭典が執り行なわれた。夕闇がせまる時刻になると、氏子の人々が三々五々御旅所に集つまり、五穀豊穣・海上安全の敬虔な祈りをささげ祭典は終了した。

広場の土俵では、子供相撲をはじめ諸行事が夜の更けるまで行なわれ、大賑わいであった。

貴船神社祭
―玄海町神湊―

去る十月二十一日、午前十一時より、玄海町神湊字上中上町の玄境内に於て参列者全員と枝区民が参集し名物の〝ドジョウ汁〟の直会が盛大に行なわれた。この〝ドジョウ汁〟は江戸時代より伝わる同地方の名物料理で、古老の話では「海に近いこの地では魚が豊富にあるはずだが、庶民には値が高く高級品で、盆・正月以外は口に入るので何の不満も持たない。この人生は実にすばらしい。と老人の寄稿は、自画自賛とはいえ尊いものさえ含んでいる。

一読、羨望さえ感ずる。老後の愚痴の羅列、殊に社会施策への満や若者非難の多い記事に悩いている時、身辺の満足を楽しんでいる姿は、ひとことながら嬉しく読んだ。

子孫の生活破綻、物質面の依存要求はじめ兄弟不和、老親尼介視など身辺に話にならぬ不幸の因素が取り巻く事実も少くない。いや八十翁の先述の幸福観の方が得難く、ノラ息子の借金のために土地家屋を手放し、虎の子の恩給まで、自分にとっては無上と言いたい身高利貸に搾られる暗黒面もいやとは縁遠い。

文字の国中国の諺には、寸鉄肺腑を抉る類が多く、適切に登場すれば苦笑を誘う。

縫殿神社祭
―津屋崎町奴山―

錦秋の去る十月五日、当大社の境外摂社である、縫殿神社（宮司・永島俊一氏）の秋季例祭が、同神社氏子多数参列のもと厳粛に斎行された。祭典には当大社より幣帛を捧持した職員一名が献幣使として出向奉仕した。

祭典終了後、麓の奴山公民館に於いて参列者全員と枝区民が参集し名物の〝ドジョウ汁〟の直会が盛大に行なわれた。この〝ドジョウ汁〟は江戸時代より伝わる同地方の名物料理で、古老の話では「海に近いこの地では魚が豊富にある被害を受けたが、氏子が一丸となって補修を行い、本年の祭典を無事迎え盛大に斎行されたのである。

八所宮祭
―宗像町武丸―

古くより四郡相撲で知られる、八所宮（麻生正敏宮司）の秋季例祭が去る、十月十二・十三日の二日間にわたり盛大に斎行された。

同宮の祭典は武丸校区民あげての祭典であるが、郡内外より多くの崇敬者も参拝参列して執り行なわれている。今年も祭典期間中の境内に於いては、演芸大会、奉納相撲大会、献茶祭、献詠短歌大会等種々の行事が二日間開催され、又境内には昔ながらの露店も二十数軒が店開きをして、家族連の参拝者で終日賑わっていた。

尚同宮は、去る九月の台風十八号で本殿横の大木が倒れ拝殿を破損し、屋根ガワラが飛散するという被害を受けたが、氏子が一丸となって補修を行い、本年の祭典を無事迎え盛大に斎行されたのである。

三人寄っても

長い人類の歴史は、興に盛衰の話せば堅過ぎるかな。

中に二つの奇跡を遺している。談合協議による遺物ではない、共通の特性を具えている点、まさに奇妙であり面白味もある。その一は酒、他の一は詩。この同者を今日も持たぬ民族はあるまい。

般若湯と器び寸瓶酒と嫌ったりするアルコールは、ここでは取り上げない。酒詩と称する民族の生活の中に生れた真理の寸言を、少し拾ってみよう。詩の多くは真理の骨格にユーモアの衣裳を着けて、生活した智恵の味に微笑ましい人生観が覗る。人生観まで引出して「三人寄れば文珠の智恵」を言っても、どこでも通用とはゆかぬ。「壊も木から落ちる」と、賢人の珍しい失策に引用するが、「文珠も智慧のこまれ」とぬかりはない。「三人寄っても下種は下種」が古くから巷間に生きている。

「馬鹿の子も三年経ては三つになる」あたり前のことだが、ボンクラ息子は何年待っても戸籍上の年齢計算のように、プラスされない。「百年河清を待つ」でくたびれもうけの愚極に終る。

頭数だけ増えると脳味噌の中もエリートなみの向上とはゆかないのが常識である。この常識こそ当の文珠菩薩にも異論ない常識であ

る。この常識はまた偉大なる智慧も秀れていたので一般の青年なみの集積と讃えることができる。それ、青雲の志を堅めていた。ところが堅い志の通り境遇は自分は歩ませてくれなかった。中等程度の学歴で社会に出た。大学進学は、はかない夢と終りかけたが、夢と終らせてたまるか、自分が働いて作る学資貧しい農家に生れて、幸いに頭の幸福な人生観を楽しく抱いて生きている。この幸福に人生の結論があったことを今楽しんでいる。

人生の幸福は財産でも肩書でも成功でもない、自身が今持っている自分にとっては無上と言いたい身の文珠菩薩にも異論ない常識であ

残筆しがらみ草紙 (23)
玄陽隠士

それによれば、自分は今日無上で、自分の子供達を望みの通り勉学させやるこだ。数人の男の子は概ねその志を遂げて今日会社の社長重役の地位に在って活動を続けている。娘達も夫々社会的に信頼のおける主人の妻として、自分にとっては無上と言いたい身分に十分の安堵感を与えてくれ、慈父としての自分を労わってくれる。

運命の智慧菩薩が驚くかも知れない文珠論になったが、智慧のこぼれと自嘲する外ない。諺に利用して「嘘も方便」と釈迦牟尼が言ったとされる方便説は怪しい。文珠が左側に同候して智慧を司っているかからは、嘘の方便説などは不手際極まる。

三人どころか数百数千寄っても文珠の智慧が出てこないのが、近頃の大衆運動とも言えよう。真剣な思考と、自我を離れた協調献身の見られない運動は、単なるお祭騒ぎの無駄で、文珠の智慧などとは縁遠い。

文字の国中国の諺には、寸鉄肺腑を抉る類が多く、適切に登場すれば苦笑を誘う。

こうのかなと神湊 (82)
楠早鳥作
福田長庵画

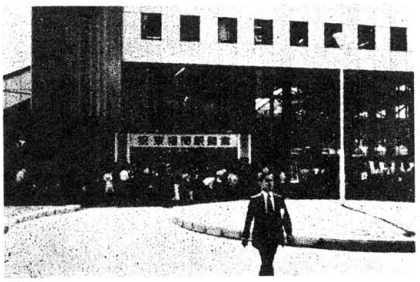
四塚（その一）

山口の街並は数年前とかわらぬ賑いをみせていた。昨夜防府で船をおり山口の邸に入り、昼前大内館に伺候することとした。久振りに会うすぼらは心なしかやつれが目についたが、話もそうそうに、邸を出た。義弘に会い京師の状況を報告し、次に宗像へ帰国する話をもちだそうとする矢先に、義弘が口を開き〈実は朝鮮王定宗に土地の割譲を申し入れて〉と言う〈それはまた大胆な〉明継はうなった。〈何分にも当家は、琳聖太子の子孫でな〉笑い声をたてる義弘をみて黒い野望を感じた。―大内氏は百済の聖明王第三子琳聖太子が推古天皇の十九年に日本に来て、九州の多々良浜に上陸をし帰化したのが祖であると伝えられている。多々良浜に着いた琳聖太子はいったん摂津国にて恐懲太子に謁し、周防国大内県（あがた）を与えられ、多々良の姓を賜ってから再びこの地に入り琳聖太子の墓まで造ったのか、明継は考えた。応永二年以来の親交と倭懲庄から生じた鮮矮内部の信頼からみても不可能なことではなかろう。当時朝鮮においては八将軍の勢威をもってしても、容易に鎮圧できなかった倭寇が、義弘の攻略にあっては、たちまち武器を投げすてて降伏した〉と言って義弘の勢力を畏敬していたのである。その后、定宗は義弘の土田要求にたいし、まず有司に命じ大内氏の家系を調査させたが、世代が遠くへだたっていて、これを証明するだけの記録がなかった。そこで仮に百済の始祖、温祚王高氏の後裔ということにして、土田三百結を与えようとしたところ、これには流石に反対が多く中でも簒書中枢院事権近は、土地を与えることは後世かならず子孫の憂患になると主張し理由七ケ条を掲げ強力に反対した。しかしながら、その権近もまた義弘の功績は十分に認めていて、土田を贈るかわりに帰属の贈与を提議したが、定宗はすでに決定した事がらであるとしてこれを却下した。権近につづいて左散騎常侍朴錫令は中国の戒を引き、全羅道において義弘に賜給すべき土田の調査に着手したがその后においても、なお必死の反対がくり返されたので、さすがの定宗もついに給田を思いとどまった。応永六年七月、義弘の使僧が帰国するにあたり、定宗はこれを西京庁に引見して、義弘および将軍に対し、討賊の常を深謝したが、土地賜給のことは、黙殺されないで、単に半麻布および人蔘、虎豹皮などを贈り結局は爵位さえも与えなかった。こうして土田要求はうやむやのうちに葬り去られ、ついにおわったがこの事件が大内氏の対鮮交易におよぼした影響は決して少なくなかった。義弘が百済王の後裔であると宣言したことは、大内氏と朝鮮の関係を不動のものとし、この後も大内氏はしばしばこのことを持ち出して、朝鮮との交易を有利にみちびき、朝鮮もまた大内氏に特殊な待遇を認め、他の豪族と区別してこれを優遇したのである。

昭和五十三年十月二日

「東福駅間」竣工落成 営業を開始

――東福間町民十六年の悲願ここに結実――



福間町々民待望の国鉄「東福間駅」の竣工落成・開業式が、錦秋の去る十月二日盛大に執り行なわれた。

竣工落成式典には、門司鉄道管理局から吉田敬一局長以下関係者、亀井光福岡県知事、的場重郎福間町長をはじめ東福間駅設置促進期成会・推進協議会関係者、来賓として、伊豆善也・花田新太郎両県議、郡内町村長・議員、官公庁、各種団体代表、地元住民等多数が参列、駅舎正面に於いて厳粛・盛大に行なわれた。

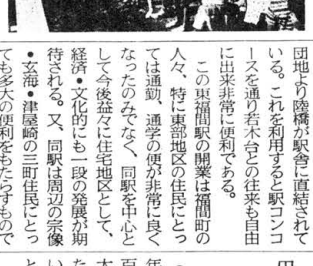
引続き、開業式が行なわれ、吉田門鉄局長、亀井知事、倉元福間町助役の三氏によって、正面玄関に張られたテープのテープカットで、十六年間この日を待ち望んでいた地元住民が一斉に、万国旗で飾られた新装の構内に入場、同駅初停車の電車を迎える為、下り線ホームに殺到、同ホームは瞬時に人々であふれ、上り線ホームも人並でうまった。

定刻の午前十時三十八分、久留米行の電車が人々の打振る国旗や観迎のプラカードの中を最除行で進行、静かに定位置に停止すると、期せずに〝バンザイ〟の声が沸き上がった。直ちに地元代表の美女二人から、運転手と車掌に花束が贈呈された。続いて上り線ホームでも門司港行の初停車の電車乗務員に花束が贈られ、「東福間駅」の開業式典も無事終了した。

この東福間駅は東郷駅と福間駅の中間に位置する、福間町津丸に去る、昭和三十七年五月に新駅設置を国鉄に請願したのに始まって、制四十九年一月亀井知事を会長とする同駅設置促進期成会が出来、同五十一年一月門鉄局長より設置基本方針が出る。同五十二年一月駅建設推進協議会が発足、駅建設費の受益者負担が決定、同五十二年七月国鉄本社より駅設置の認可が出る、同年十一月駅建設総費九、〇〇〇万円を国鉄へ納金、同五十三年三月二十四日起工式が行なわれた。

同駅の概要は、橋上式駅で線路の上に駅舎・改札口があり、利用者は東福間・若木台両団地より出入できる。ホームは上下二本（長さ二四〇・幅四㎽）であり、停車する電車は現在上り二九本・下り三十本（快・特別快速は除く）である。駅員は民間委託駅であるので現在、日本交通観光社九州支社が駅務を委託され、同社の社員である広度義民を駅務長として以下三名の社員が職員として交代で管理している。

施設としては、駅舎内にキップの自動販売機二台（五〇㎞まで）、駅事務室、公衆トイレ一ケ所がある。駅前広場は東福間団地側に二三〇〇㎡・若木台団地側に二七〇〇㎡の二ケ所があり、自転車置場、照明灯が設置されている。東福間口側には公衆トイレ一ケ所も設置されている。



特に東福間口側はすぐ前を旧国道三号線が通っているので東福間団地より陸橋が駅舎に直結されている。これを利用すると駅コンコースを通り若木台との往来も自由に出来非常に便利である。

この東福間駅の開業は福間町の人々、特に東部地区の住民にとっては通勤、通学の便が非常に良くなったのみでなく、同駅を中心として今後益々に住宅地区として、経済・文化的にも一段の発展が期待される。又、同駅は周辺の宗像・玄海・津屋崎の三町住民にとっても多大の便利をもたらすものである。

宗像宮讃歌

大野恵造

天に扇あり　垂るるは紅の糸花
三柱の姫神　貴に粧い給ひて
奥殿の御鏡の内にぞ　在します
福徳を分ちて　諸人に美しき
夢　授くるは　この　宗像の宮
あゝ静かなるかなや　瑞垣の裡
歳経にし　楢の御神木は繁りに
茂りて　いよゝ昌なりわいの
幸もかくあれかしくよ　念じつゝ
吾ら詣ずるは　この　宗像の宮

表千家献茶祭 厳粛裡に斎行

――表千家・家元千宗員若宗匠の点前で――

当社における秋の文化行事の開幕にふさわしく、例年行われる表千家献茶祭が、神嘗祭に当る十月十七日、午前十一時より拝殿において表千家千宗員若宗匠の点前によって斎行された。

この日は、秋晴れの好天に恵まれ、午前八時頃より九州各地をはじめ山口方面からも多くの同門会員又関係者約九百名もの人々がつめかけ、社頭は一段と華やかな雰囲気につつまれた。

午前十一時大太鼓を合図に、神職をはじめ表千家点前関係者が、拝殿に進む頃、同外拝殿はすでにこの点前を一目参観しようと多くの会員によって取り巻かれていた。

これまでこの献茶祭は、表千家千宗左宗匠の点前によって奉献され、昨年初めて千宗員若宗匠の点前、宗左宗匠の後見によって奉献された。しかし本年は千家員若宗匠自からの点前奉献であり、ここにも時の流れを感じさせるものがあった。

約二時間にわたる点前の静寂と薫り高い香の中に、若くしてはち切れんばかりの緊張感が一節の流れをなし、深まり行く秋の風情にも似た清涼感を与え茶名「清昔」の二服の茶が献じられた。

一方境内の斎館、宿衛舎の二ケ所には同門会席、出光席の二副席が設けられ、同祭典に参列した約九百名の人々はそれぞれ茶席にのぞみ大澄国師「偈語」の掛物をはじめ利休「竹一重切」の花入、「井戸」の茶碗、「鹿蒔絵」の棗箱等の名品に見入り、つるべ落しに暮れる秋の夕日の中いつまでも行列が続いた。

第十七期 出光店主室教育 宗像大社研修会開催

春秋二回に亘り例年行われる宗像大社研修会は、去る十月二十四日～二十七日までの四日間、研修生二十九名が参加して行われた。

この研修は月月中旬の伊勢の神宮参拝に始まり、東京での研修と四十余日間をかけ行われる。当初二十四日午前中に特急で福岡入りし、正午より当社の研修日程に入る予定であったが、前日の東海道線の脱線事故のため、急遽新幹線での福岡入りとなった。

しかし午后三時ごは、全員無事に到着し、研修生一同初めての白衣白袴に着替、正座を主とした厳しい研修に入った。この間早朝の起床、潔斎に始まり清掃、朝拝と、これまでにない研修内容にしばし戸惑った様子であった。

二十五日に福岡教育大学山田教授の「今後の日本」、又当社饗宴称宜の「宗像大社の歴史と神宝館建設」と題した講演が、又二十六日には当社摂津宮司の「神性の道」の講話がなされ、その後全研修員による直会を兼ねた懇親会がなされた。この席上北海道から南は九州に及ぶ各地の民謡をはじめそれぞれの持歌の披露がなされた。

二十七日、生憎の雨天であったが研修生一同は、長く厳しい四十余日の研修を終えて晴れやかな笑顔で土、日曜日と続く連休を故郷へと向った。

町の話題

（各町々報より抜萃編集）

宗像町 田久子ども会 県表彰を受く

宗像町田久の〝田久子ども会〟（会長・加藤重君＝赤間小六年、指導会長・坂本真弘氏、会員百十五名）が、去る十月二十二日大牟田市は笹林小学校で開催された「第十二回福岡県子どものつどい」で、福岡県から優秀子ども会として表彰された。

田久子ども会は、紙細工や親子で作るわら細工等の創作活動、また、文庫活動などユニークな活動を意欲的に行なっていることがこの度の表彰となった。会長の加藤君は「こんどの表彰は本当にうれしい、今までは自分たちのための活動だけであったが、今後は奉仕活動に力を入れていきたい」と受賞の喜びと共に、今後の活動方針を力強く語っている。

県子どもつどいは、県子ども会連合会と県教育委員会が主催、「県下の子ども会が、互に連絡を取り、力を合せ、自主的な子ども会活動を充実発展させる」ことを目的に毎年開催されている。

玄海町 第十九回町民体育 大会盛大に開催

第十九回玄海町々民体育大会が秋晴れの、去る十月八日（日）玄海中学校グランドに於いて開催された。

大会は、午前八時三十分より、玄海小学校の鼓笛隊を先頭に町旗、国旗に続き、各校区、職域の選手団の入場行進が行なわれ、高橋半三大会々長（町長）の挨拶の後、青年団代表の選手宣誓が力強く秋空に響き、大会も一段と盛りあがり開会式を終えた。

競技プログラムは、小中学生の東西対抗綱引で始まり、各種リレー、あめくい競争……等連められ、婦人会の踊り（日本音頭ふたつはひとつ）を最後に午前の部を終了した。午後は商工会婦人部の踊りで開催され、一般の綱引各種団体リレー、婦人会のケツ圧測定、青年団仮装行列……等があり最後に、校区対抗リレーが行なわれ全競技のプログラムを終了した。

大島村 村民挙げて島内の美化に取り組む

家族連で手軽に行ける、近距離の離島観光・フィシングブームが年々盛んになっているが、筑前大島にも来島者が増え続けている。この為、大島村では島内の美化運動の一環として〝セイタカアワダチ草〟の除去作業が「道路愛護デー」の日の去る、十月三十日全島挙げて行なわれた。

この奉仕作業には、当日早朝、島内三百六十余戸から各一名つつ、必ず才出なければならないという申し合せにより、老若男女を問わず約五百余名の村民が奉仕して、島内全溝路と側溝の清掃・セイタカアワダチ草の除去作業を各ブロック毎の区域を決め行なわれた。最後に会員でセイタカアワダチ草の最も蔓延した地区を徹底的に除草し正午前に作業を終了した。

作業終了後、玄界灘を往交う船より眺められた〝黄色の草花でつつまれた島〟は、一点の黄色もなく緑と少し紅葉した島に変ぼうし、島内の溝路、空地はゴミ一つなくきれいに掃き清められ、折から来島した釣人は、帰途にはこれまでのように、ツリエサ、残飯等を残すこともなく、所定の処まで持って来て投棄する姿が各所で見られた。

津屋崎町 第五回福岡県消防ポンプ操法 大会で三位入賞

去る九月十七日、第五回福岡県消防ポンプ操法大会が、福岡県消防学校（福間町）に於いて、県下三十二市町村の消防団が参加して開催された。

同大会に於いて、津屋崎町消防団は自動車ポンプ操法の部に代表五名（西野正信・東比通男・富士田俊之・津崎和則・柴田文敏各団員）が出場、二十三チームで競技を行い、見事三位に入賞された。この為、大会は玄海町住民の大多数が参加し、選手は各種競技に奮斗、応援者は校区毎に別れ懸命の応援を送り〝興奮と爆笑のうずまく中〟和気合々に進められ、秋の一日を楽しんだ。

福間町 福間東中学校 起工式

福間町に於いて、かねてよりの懸案事業であった中学校の建設がいよいよ実現し、去る九月六日、「福間東中学校」と名付、同町東部の神興校区の神興神社横の建設現場に於いて起工式が盛大に執り行なわれた。

同町は年々人口が増加、九月末で二七、二二〇人となっている。特に東部の神興・上西郷校区に於いては、東福間団地、若木台団地を始め中小の団地があり、近く西部団地も完成する予定で人口の増加は今後増々進行される。しかるに、同地区には小学校は二校あるが中学校は無く（同町は一中学校だけである）、古賀町よりの福間中学校まで通学している。

現在の福間中学校は、郡内はもとより県下でも有数のマンモス校で、適正な教育に支障を来たしている。また、通学地域が広く、経済的、体力的、生徒の生活指導に多大の負担と不足を与え、町民挙げての強い要望により、同町では他の事業を押えても早期開校を目指していたが、この度の建設起工式により来年四月には開校されることとなったのである。

祈願殿の化粧直し ―新年を迎えるにあたり―

当大社祈願殿の化粧直しが新年を前に突貫工事で行なわれている。去る昭和四十五年の昭和大造営の時に、全国の神社殿でも数少ない最新式の銅板葺屋根コンクリート造り、諸祈願祭場並に社務所として建てられてより八年の歳月を経て外装の汚損が進んできたので、工費三百余万円をかけて、屋根の銅板締付、外装のサビ落し並に塗装の塗り替等の作業が十月中旬より進められている。

祈願殿は前述の通り建造されてまだ八年しか経過していないが、玄界灘の荒海に面し、間口六十六米・奥行二十二米・高さ十六米に及ぶ大建築物で、四季を問わず玄界灘よりの吹き荷ける潮風の強風をまともに受けて、予想以上の被害が出てきたものである。

――◇――

現在工事進中で参拝者の皆様方には、大変御迷惑、御不便をおかけ致しておりますことと深くお詫び申し上げます。

宗像大社々務所

宗像大社歌会 俳句作品集（180）

大井　吉田ますみ
平凡を愛す齢や花むくげ

有吉　春子
同窓会降り立つ駅の雁来紅

吉田　和子
持ち物に眼鏡たしかめ秋の旅

中野　きみ
茸売りの来て値切り賞ふ湯沿客

安部　吟松
孫の子とふるさと話秋灯下

田熊　安部　ゆき
鰯雲無為の一日や三里灸

大井　木原　房子
蝉時雨城主の墓所へ磴ゆるき

福岡　入江　文子
台風や嫁の親切敬老日

名古屋　野崎　博三
わが吉祥の祝にすがる秋の螽

藤沢　玄洋子
金色に光る稲穂や里の秋

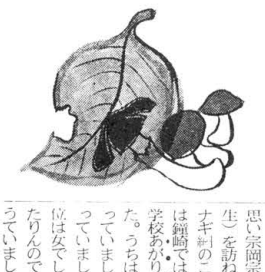
田熊　力丸　一郎
稔る秋日中友会実あがる

土穴　八尋　恒夫
鈴出の鳴声ゆかし庭澄み

福岡　力丸ゆずる
碧空に紅一点の残り柿

福間　広渡一寿軒
運動会日は総出の秋日和

田島　吉武　武雄
秋晴にラマ塔鎮征野かな



海の寄物

貝寄せ風 (1)

いしいただし

（十六）

春頃の風を、貝寄せ風とも呼んでいる。風と波にあおられて生貝が打ち寄せられるからである。長崎県西彼杵郡野母崎近くでは、キヤーヨセと訛っていう。大阪の四天王寺には貝寄せの聖霊供養もあるというから、相当にその量は多かったと思われる。貝を打ちあげるのは、春だけでなく、北西の季節風が吹く冬にも多く見られる。これは貝の生息と大いに関係があり、特に貝は異常発生することが多くて、そんな時には一度にバケツ数杯も拾うこともある。数年前には宗像郡福間浜でバカガイが、更に粕屋郡古賀花見ではサルボウが、今年は食用にはならないが、サクラガイに似た力バザクラという約一、三センチほどの薄桃色をした貝が、宗像郡福間花見に大量に打ち寄せられた。

玄界灘岸で寄せられる二枚貝と巻貝の主なものについて記してみよう。バカガイは一見するとハマグリに似ているが、殻はやわらかい。打ちあげられたこの貝を見ると、口を半開きにして足（舌）を出したままであり、そんなしまりないところからバカガイとつけられたという。この貝のむき身は「青柳」と称しているが、むかし千葉県青柳村で大量とれたところからつけられたそうである。また貝柱だけを集めたものがアラレと呼ぶ。この貝の大きな足の部分を干したものが姫貝といわれ、最高の珍味である。

サルボウはアカガイによく似ている。この沿岸でアカガイと呼んでいるものの、実際にはサルボウである。サルボウは殻の表面に茶色の毛が生え、しかもアカガイと同じように身が赤いためにこの名がある。別名を漢貝（もがい）とも呼ぶが、幼貝は足で蟹に付着することからつけられた。

ハマグリも時折り打ちあげられるが数は少ない。宗像郡津屋崎町勝浦付近には大きな死殻が漂着する。これと同じ仲間にチヨウセンハマグリがある。殻が厚く、殻表の模様がハマグリに比較して少ないが、別にチヨウセンとは関係はない。「かわっている」程度の意味である。外洋性でこの沿岸に多くみられる。コタマガイもハマグリに似ているが、ハマグリのように丸味が少なくやや角ばった感じがする。味はハマグリより落ちる。そのほかにシンケイガイ、トリガイ、ツキヒガイ、イタヤガイがある。大マテは筑前続風土記に福間浦に多く見られると記載されているが、今も数は少ないが打ちあげられる。

巻貝ではニワガイ、ナガニシ、ツメタガイ、テングニシもよく見る。打ちあげられた二枚貝や巻貝の貝殻を観察すると、丸い小さな穴がほげているのを見かけるが、これはツメタガイによってけられた穴である。あるいは八～十月頃、丁度「お碗の底を抜いて伏せたような形の砂細工」を見かけるが、これはツメタガイの卵の塊（砂茶碗）である。ツメタガイは身は堅いが、案外とうまい。ナガニシは身が真赤で見た感じがあまりよくない。海藻と共に一ケ所に大量に漂着することがある。以上のべた貝は、だいたいこの沿岸に生息しているものである。

海流によって運ばれてくる貝もある。ルリガイやアサガオガイで、足から分泌した粘液の泡でつくったいかだの下にぶらさがって、温暖海を漂うのである。殻は薄くてもろいが、殻表の紫色が実に上品な色をしている。私はまだ一度もこれを採集したことはないが、鞍屋郡新宮浜で採集したものを、魚の博士、内田恵太郎先生宅で見せていただいたことがある。

写真　海が荒れたあとに貝殻がうちあげられる（福間浜にて）

鐘崎民俗誌 その九

楠本記

カナギ房丈網

大正時代の福岡県下の漁業事情を記録した「筑豊沿海史」を読むと、鐘崎の項に「玉筋魚房丈網、明治三年より、この網を使用し来り、現下二層盛況に向ひ、船数五十五隻あり。」と記し「当時本浦を通じて玉筋魚網十七張、その盛況、真に想ぶべし。」と述べている。

玉筋魚房丈網とのどんな網かと思い宗岡宗一さん（明治三十二年生）を訪ねると「あゝ、それはカナギ網のことですたい。カナギ網は鐘崎ではなかなか盛んで私も小学校がかりの頃からとっていましたい。うちは、その頃舟を三隻もっていまして、一隻に六人づつ乗っていました。乗組員のうち二人位は女でした。家族だけでは手がたりんので、あっちこっちから帖かうんとかりると浜の砂を掘って床をつくり、その上に平釜をのせてゆでであげ、天日で乾燥させますこれをホンカといい農家では肥料にします。このホンカを農家にやって米とかえていたのですが、この五〇年位前、私が三〇才ぐらいの時は、それはうんと獲れまして上八、田野とか近在の農家だけではさばききれず、遠賀郡の芦屋の先の大聖寺、ヌカズカあたりの農家までもって行きました。ところがあの辺は米がとれませんので辛とかえました。それで家の中に大きなイモガマをつくったのを覚えています。」

宗岡さんの話を聞いて、帰りに鐘崎漁協に寄りカナギ網の現況を尋ねると、四〇隻ほどがブリ釣のエサ用として操業しているとのこと、乾燥させるほどの漁はしていないとのことであった。それにエサ用としては新鮮さが要求され、あまり多獲する必要もないのでスクイ網を利用している舟もあるということであった。

房丈網

附記、

明治二十三年に編纂した福本県漁業誌の中に「明治十年代に天草下宗像郡鐘崎村ニ遺ンタリ四人ハ彼地ニ達スルヤ直ニ漁者ニ就キ投シテ全県ノ漁法ガわからず苦慮していたところ、たまたま福岡県に適当な漁具のあるのを聞いてこの秘法を習得するため天草郡赤崎村上原典礼という人が一明治十九年二月肥前仙蔵・今福伝吉・今用造・黒木弥三次ノ四名ヲ撰ミ私金ヲ投シテ全県ニ語フス因テ各其志ヲ見ザス別レテ漁者ノ屋夫トナリ専ラ漁具漁法ニ注意シ勤勉怠ルナク遂ニ夫二年ノ春ニ至リ始メテ之ヲ実地ニ使用シ好結果ヲえてこのことが遠近ニ聞えて島原地方ニ伝播し有明海のカナギ漁が盛んになったーと記されている。これは鐘崎のカナギ漁がいかに盛んであったかを知ることができる。また、昭和四年に福岡県水産課が発行した「福岡県漁村調査」をみると大正末年の鐘崎浦の漁獲金額七万円から八万円のころカナギ網による収獲が三・四万円であったことからも網漁の主体はカナギ網であることがわかる。

房丈網は江戸時代に姪浜の岸学に類するものであり、また一方、土佐日記・東関紀行・海道記のような旅行記に類するものもいろいろあるが、それらはいずれも純粋な日記ではないから、ここにいう日記とは少しその趣を異にしている。

ところが女子の仮名文の純粋なしかも個人的な日記として今日に伝えられているものは藤仁斎（じんさい）夫人里村氏の日記のような有名なものもあるが、概してその例は少ない。ただ近衛家に伝えられている円覚院殿御日記（近衛経熙室寧子の日記で五十四冊ある）や、無上法院殿御日記（近衛基熙室孝子の日記で六十二冊ある）のような本人自筆のものは、女子の日記の例としてまこと珍重すべきものである。現今我々が日記といえば、一般に単なる個人的な区々たるものとして考え られ易いようであるが、古い日記はたとえそれが誰のものであっても、古文書と同様に史料として最も価値の高いものであり、これによって幾多の史実が明確にされるのであって、日記についての研究も相当に進んでいることはいうまでもない。

〔年中行事〕

日記（にっき）十月号続き

男の日記は、紀貫之の土佐日記のような例もあるが、ほとんど漢字で漢文句調のいわゆる日記体の文体で書かれているのが普通である。これに対して女の日記は、概して仮名文のものであった。紫式部日記・和泉（いずみ）式部日記・更級（さらしな）日記・蜻蛉（かげろう）日記・讃岐典侍日記などは同じく女子の仮名文のものであるが、これらはいわゆる日記文学に類するものであり、また一方、土佐日記・東関紀行・海道記のような旅行記に類するものもいろいろあるが、それらはいずれも純粋な日記ではないから、ここにいう日記とは少しその趣を異にしている。

ところが女子の仮名文の純粋なしかも個人的な日記として今日に伝えられているものは藤仁斎（じんさい）夫人里村氏の日記のような有名なものもあるが、概してその例は少ない。ただ近衛家に伝えられている円覚院殿御日記（近衛経熙室寧子の日記で五十四冊ある）や、無上法院殿御日記（近衛基熙室孝子の日記で六十二冊ある）のような本人自筆のものは、女子の日記の例としてまこと珍重すべきものである。現今我々が日記といえば、一般に単なる個人的な区々たるものとして考え られ易いようであるが、古い日記はたとえそれが誰のものであっても、古文書と同様に史料として最も価値の高いものであり、これによって幾多の史実が明確にされるのであって、日記についての研究も相当に進んでいることはいうまでもない。

遺言（ゆいごん）

死後その効力を生ずべきものとして、生前にあらかじめ自分の意志をいい残す詞（ことば）のことであって、これを文書に残したものが いわゆる遺言状或は遺書である。

現今の民法にはこれについて詳しい規定が設けられている。遺言の場合、これを訓誡として残すものを遺誡（ゆいかい）或は遺訓（ゆいくん）という。

宇多天皇の「寛平御遺誡」や、右大臣藤原師輔（もろすけ）の「九条殿御遺誡」や、左大臣藤原頼長がその二子に残したものや、毛利元就のその三子への遺訓などは共に有名なものである。

元来遺言そのものは、形としては残らない性質のものであるが、歴史研究の材料となる遺言は、大体遺言状においてのみ見られるそれであって、これにはいろいろな形式のものがあるが、一方いわゆる処分状の中にも、この遺言状的なものも少なくなく、それが共に史料として有用なものであることはいうまでもない。この処分状というのは、史的用語としては、生前乃至死後において自分の資財を後の者に無償で移譲すべきことを契約する意味のものであるが、これにもまたいろいろな場合があって、もちろん遺言に近いものも少なくなく、自然その処分の内容事柄を文書とした処分状の中に遺言状的なものもあったことは当然である。

遺言状・処文状は共に平安時代中期以後において、上皇天皇から下は一般庶民のいろいろな形式のものが、その原本のまま、しかも相当数多く伝存しているが、それらにはいずれも自分の意志を明確にすると同時に、その内容事柄を後の者に対して自ら保証するという意味のために、日付のほかにかならず本人の名前・花押（かおう）・印章（いんしょう）・印判乃至母印（ぼいん）などが適当に加えられている。

◇十月祭典案内◇

一　日
秋季大祭第一日祭
海上神幸祭（みあれ祭）
中津宮出御祭　午前八時
屯宮祭（神楽）　午前十時半
辺津宮本殿祭　正午
御座船＝沖一丸（大島）、福神丸（鐘崎）奉仕
御座車＝柴田晶子氏（栗組・戸畑区）、黒木威氏（黒木クリニック・八幡東区）、藤川襄雄氏（門司陸運・門司区）奉仕
饗台奉仕＝大島・鐘崎・神湊各漁協青年部
奏楽奉仕＝県神社庁雅楽部会員
神宝捧持＝玄海町青年団奉仕
風俗舞奉仕＝田島地区青年団
浦安舞奉仕＝地元氏子女子中学生
参拝＝八幡・戸畑・遠賀各宗像会、釧路出光会

二　日
秋季大祭第二日祭
第二宮・第三宮祭　午前九時
辺津宮本殿祭　午前十時
宮地嶽神社献幣使＝宮権祢宜奉仕
氏子奉幣使＝脇野十郎氏（福間町）
翁舞奉納＝梅津社中（福岡市）
奉楽奉仕＝県神社庁雅楽部
参拝＝福岡市観光課五十名、衆議院議員山崎拓氏

三　日
秋季大祭第三日祭
屯宮祭　午前十時
宗像護国神社祭　午前十一時半
献茶祭　午后二時
南坊流滝口社中奉納

四　日
出光興産（株）徳山製油所中野太平常務取締役参拝
五　日
出光徳山宗像神社祭奉行
饗父祢宜、神島、宮崎権祢宜、川井田、市津巫女出向奉仕
田島校区婦人会二百余名境内清掃奉仕

六　日
仁和寺門跡立部瑞祥大僧正来社
全国国立図書館協議会二十五名参拝
出光興産（株）愛知製油所永島直則副所長外参拝

七　日
献茶祭
表千家千宗室若宗匠他奉仕

二十一日
宗像町商工会青壮年部菊花展準備作業奉仕

二十三日
七社神社湍津舞奉納、石橋、宮崎権祢宜、小野、力丸巫女奉仕
早咲日女神社敬神婦人部四十名参拝
出光興産（株）麻生和正店主室長他研修会打合せの為来社

十二日
出光門司宗像神社例祭奉行

十四日
楠本祢宜他奉仕

十五日
小村汽船（株）代表取締役小村迫氏参拝

十六日
月次祭奉行

十七日
末松良介出光美術館館長代理献茶祭準備の為来社

十七日
楠本祢宜他奉仕

十八日
鄙鳶都三輪町町会議員二十名参拝

十九日
第十七期出光店主室教育研修本日より四日間に亘り開催、研修生二十四名宿衛舎

二十七日
神宝殿建設工事地鎮祭並起工式

二十九日
宗像青年会議所菊花撒人奉仕